

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 290 回 「お互いの幸せ」へのヒント～山本五十六元帥の言葉

2008.12.21

なかなか自分の思うように、人は動いてくれない。社会関係、親子関係も然りだが、とりわけビジネスの世界では、永遠の悩みとして大きな課題となっている。

そう簡単には、人は動かないのである。いくら組織を作っても、50 人ぐらいまでの会社は所詮中小企業、大企業のような組織的対応は通らないのが実際の話だろう。大学出たばかりの実務経験の少ないエリート達、JC（青年会議所）や 青年部、 経営塾等々で刺激を受け、意気揚々と経営改革を目指そう...こんなタイプの青年経営者達、いきなり組織作りをはじめることが多い。気持ちは良くわかるが、往々にして期待した効果は拳がらない。

中堅幹部の課長さん、部長さん。上司だからといって、命令や指令を出せば部下は動くと思っていたら、大間違い。一向に部下は動かない。中小企業の社長さんも同じである。いくら立派な組織図を作っても、実態は意識的に「鍋蓋」組織、長が独りいるだけで全員フラット...課長も部長もあつたものではない。残念ながら、実は組織が、「組織として機能しない」ということなのかもしれない。

リーダーたる立場のものは、中小企業だから余計に、人間的関係で繋がっていることを理解すべきである。人はそれぞれの心(感情・望み・考え)に従って動いている。だから、ただ言うだけでは、なかなか動いてくれないのは、当たり前なのである。自分が望むように人を動かすためには、本人をその気にさせることが必要なのだろう。そのためには、相手の心を動かす努力が大事なのである。

そんな時、いつも思い出す言葉に、山本五十六(明治 17 年 4 月 4 日～昭和 18 年 4 月 18 日、26、27 代連合艦隊司令長官、元帥海軍大将)の言葉がある。ご存知の方も多いと思うが、改めて披露したい。

やってみせ、言って聞かせて、させてみて、

褒めてやらねば、人は動かじ

話し合い、耳を傾け、承認し、

まか
任せてやらねば、人は育たず

やっている、姿を感謝で見守って、

信頼せねば、人は実らず

部下の前で自らやって、お手本を見せ、容易にできると思わせる。親しく丁寧に言って聞かせて、納得させ、なんとかやらせてみる。褒めて、いい気分にさせ、その気にさせる。その実践ができる人に、「人」はついてくるのかもしれない。人の心を動かすことができる人...こんな人になる、あるいは、そんな人と巡り合うことは、お互いの「幸せ」であろう。山本元帥の言葉は、その大切なヒントである。